



2012 · 4

**SORA** 42号

行橋 安武 晨子

芽起しの雨にやすらぐ土匂ふ  
神仏の混みあふ里も春めける  
麦青む畦ごとに日をたくはへて  
人に別れ冬に別るる遠嶺みて  
水温む土ふつくらと盛上る

東京 古川 夏子

深川に今も御宿薄紅梅  
日脚伸ぶ神田須田町定食屋  
月島に雪の残れる夕間暮れ  
金町や夜の雪消えし浄水場  
春時雨有楽町の人恋し

山梨 野畑 さゆり

遠野火やアルプス暮るるあかあかと  
花豆のふつくら炊けり福寿草  
春雪を載せしタンク車越後より  
風葬の話となりぬ春炬燵  
啓蟄や封じこめたる夢のあり

福岡 山内 碧

追羽子や漸うやう音のつながりぬ  
突く羽子の澄みし音聞く昼下がり  
塵一つ無き朝の道冴返る  
如月や動きかち合ふ家の内  
止まりたる車窓に十字架ケル鳥曇

大阪 青木 朋子

除夜詣父の手のひら厚かりき  
父の手の雑煮いたたく三が日  
半日で飽きし手鞠や土間の隅  
追羽子のカンといふ音また途切れ  
下戸の父並べ始まる歌かるた

粕屋 長 憲 一

老僧の箒にあまる落葉かな  
山ねむる宿の時計が低く鳴る  
絆纏に町の名刺して出初式  
あたたかや歳問へばまだ米寿だと  
重なれる峯かきわけて初日の出

吉井 高倉 恵美子

生かされて春の光の中にをり  
病室のドアに似顔絵桃の花  
夫の来て村の噂や春霞  
百歳の叔父に見舞はれ山笑ふ  
呼び入れて話の弾む春炬燵



空作品抄 — 柴田佐知子抽出

残り鴨人に汚れてゆきにけり

さくら守今年も同じ樹齡言ふ

夕桜止めしバイクに微熱あり

紙漉くを覗くはうしろめたきかな

横目して走る雄鷄落の臺

厨までぐるりと遠し寒葵

草を出し雉の尾羽は天を指す



高倉 和子

中田みなみ

荒井千佐代

服部 早苗

柴田志津子

だいじみどり

宮井 知英



詳細は坊主に問へと亀鳴けり

春立つや鳶職が空行き交ひて

あたたかや鶏押し退けて卵取る

退院し芽吹く我が家にたちろぎぬ

入口も出口も混みて花の山

ふくろふの首なき首を回しけり

鬼すべや親子三代藁の角

自販機の真夜は喰りに寒九郎

春潮の脈乱したる七ツ釜

ビツクバンの音聞いてゐる海鼠かな

後悔の果ての呻吟すき間風

遠山は母のまなざし春田打ち

初暦世界の美女がこちら見て

矢野百合子

田代 貞枝

苑 実 耶

小林朱夏

あさなが捷

松田明子

亀井紀子

田岡千草

秋 千 晴

吉 田 菫

鳳 蛮 華

原 友 子

栗原京子

打ち明けるその後の話桜餅

神仏の混みあふ里も春めける

日脚伸ぶ神田須田町定食屋

風葬の話となりぬ春炬燵

追羽子や漸うやう音のつながりぬ

除夜詣父の手のひら厚かりき

重なれる峯かきわけて初日の出

百歳の叔父に見舞はれ山笑ふ

淡雪のどのひとひらも一会にて

大とんど闇あたらしくして果つる

告げ口は聞こえませんかかまど猫

掛け声の闇に走りて兎狩

よもぎ餅父へ母へと供へけり

山田正子

安武晨子

古川夏子

野畑さゆり

山内 碧

青木朋子

長 憲 一

高倉恵美子

鳳 蛮 華

原 友 子

柴田志津子

松田明子

安武晨子



春寒し歩いて鳥が隠れけり

春浅し朝のパン屋の仄明り

下萌に太極拳の四肢泳ぐ

若き日の夢はまだ夢春の霜

眠たくてさるるがままの子猫かな

食卓に卒業証書広げたり

芋虫の国を出てすぐ踏まれたる

初恋の記憶あやふや春の雪

戦前へ夜咄続く床柱

翅音の濡れてゐるなり冬の蜂

神宮の百の社に雪降り積む

紛ふなき出自は百姓輝す

年明くる脳味噌減るかまあいか

小林朱夏

仲里奈央

矢野百合子

山田正子

あさなが捷

亀井紀子

長節子

宮井知英

栗原京子

戸栗末廣

吉田菫

田岡千章

白水良子

蛮華氏はをのこなりしか桃の花

春めくや本音で話す旅の宿

春うらら後歩きの保母の笛

川草の影揺らめきて柳鮓

遍路寺小さく動く母の口

槍投げの角度に春のひろこれり

春一番身体髪膚江戸つ子だい

猫好きと枯野の猫に見破らる

英彦山は雪積むころか久女の忌

立てば朱の糸くづ落ちて日永し

頬を打つ風となりたり久女の忌

喪帰りや夜目にも白き干大根

身の丈の幸に合はせて梅ひらく

織田高暢

秋千晴

片田きく

清水量子

苑実耶

池田華甲

古川夏子

青木朋子

野畑さゆり

石川叔子

田代貞枝

桜三奈子

犬丸勝子



搔卷をひきよせ夢のつづき見る

ふるきうたうたふはたのし巢立鳥

雑木山主となりたる大椿

戦場に重機つくばふ聖夜かな

水仙や膝の高さに野の仏

笑ふたび母若返るお正月

山笑ふ約束ごとは守られて

白梅をたづねてみたが留守だった

子供より親が装ふ七五三

囀りへ頬赤き子を抱いて出る

大空をしばらく舞ひし夢はじめ

軍服も軍靴も朧月夜かな

春風や町内会のやかもめて

ふじの茜

中原俊之

山内 碧

湯村 栞

遠山のり子

今井春生

小川 涼

岸 千手

長 憲 一

白木原裕毅

川崎よしみ

神谷耕輔

内藤玲二

# 空作品評

柴田佐知子

さくら守今年も同じ樹齢言ふ 中田みなみ

現在、日本には自生種と園芸種を合わせて二百数十種の桜があるという。自生種の山桜に比べ、園芸種の里桜は寿命が短く五十年ほどで樹齢が尽きる。掲句の桜は数百年存えた自生種の名桜であろう。それにしても面白いところに気付かれたことである。桜守の言う樹齢は何百年か、あるいは千年か：何度訪れても、はしたは切り捨てられ、樹齢は変化なしなのだ。守り継がれてきた立派な大桜が見えてくる。

夕桜止めしバイクに微熱あり 荒井千佐代

日本人にとって格別の情感を持つ花である桜を背景にした、いたってドライな作品。夕桜の情感とは遠いバイクとの取り合わせの意外性と、「微熱あり」という具体的な実感が句に生気を吹き込んでいる。

詳細は坊主に問へと亀鳴けり 矢野百合子

「亀鳴く」はへ川越のをちの田中の夕闇に何ぞと聞けば亀のなくなり 藤原為家により、古くより季語として定着したといわれている春の季語。夏の季語に「蚯蚓鳴く」もあるが、実際は亀も蚯蚓も鳴かない。これらの癖のある季語は、使い方次第で独自の趣をかもし出す。さて掲句、なんとも思い切りがいい。過去帳を管理する寺院は、その地域の歴史や家々の情報の集積の場であった。「詳細は坊主に問へ」には、それら諸々がいと軽やかに詠みこまれている。下五の「亀鳴けり」のとぼけた味わいが愉快だ。

退院し芽吹く我が家にたちろぎぬ 小林 朱夏

入院されたのは秋か冬であったのだろう。快復して、久しぶりに我が家へ戻る。病院に籠っている間に季節は移り、家の木々は生命力に満ちた芽吹きの時を迎えていたのである。「芽吹く我が家」は巧み、且つ的確な表現である。「たじろぎぬ」には自分が暫く留守にした家へのちよっとした違和感、そして無事我が家に戻る喜び、健全な季節の移ろいへの眩しむような思いなどさまざまな感情が籠っている。

(以下略)

# 空集

柴田佐知子選



松明が闇を揺さぶる鬼やらひ 千葉原 友子

裾の火のすぐ全形の火のとんど

大とんど闇あたらしくして果つる

芽起しの雷に会話の弾みけり

囀りや秘密基地めく村のカフェ

男の子ばかりを育て桜餅

元朝や頭上を過ぐる一番機 福岡 柴田志津子

気楽にてふ医師のひと言ヒヤシンス

告げ口は聞こえませんかかまど猫

芦原をくすぐる水も温みけり

送迎に駅のふくるる四月かな

天領の町真つ直ぐに燕来る

川の水川に還して出初式 熊本 松田 明子

校長を先頭にして兎狩

掛け声の闇に走りて兎狩

豚汁を食べて解散兎狩

寒暮来て山の影絵に金屏風

長崎 鳳

蛮華

内股で川底あさる寒からす

自己嫌悪より逃れむと酔牡蠣呑む

冴返るはためく旗の裾ほつれ

悴むや橋渡る間のひとり言

淡雪のどのひとひらも一会にて

だまし絵に遊ばれてをり春の午後